



令和5年度

学校評価報告書

帝塚山小学校



学校法人帝塚山学園

令和5年度学校評価について

帝塚山小学校は、令和5年度の教育活動及びその他の学校運営の状況について、学校評価を実施しました。

学校評価は、本校児童とその保護者を対象とした各アンケート結果、育友会等との懇談会で寄せられた御意見等を活用のうえ自ら評価を行い、さらにその結果について学校関係者による評価を行いました。

このたびの結果を踏まえ、更なる教育水準の向上を目指して、教育活動及び学校運営の改善工夫に組織をあげて継続的に取り組んでいく所存です。

帝塚山小学校
校長 野村 至弘

令和 5 年度 学校評価

1. 総括

学 校 名	帝塚山小学校
建学の精神	「社会に有為な人材を育成する」
重点目標 (教育目標)	「豊かな経験と学力で生きぬく力を育む教育」 “「根っこを鍛える教育」を目指す”
前年度の成果と課題	[成果] 令和 4 年度、コロナ禍については、以前に比べ、感染症としての実態も解明され、予防策についてもはっきりしてきたので、感染予防対策を徹底した上で、細心の注意を払いながら行事や活動を以前のものに近づけて実施することができたと考える。これにより、運動会や音楽祭、国内留学など、本校の主な行事を開催することができた。また、夏合宿については、この機会に内容を再検討し、今後持続可能なものにしていく第 1 歩にすることができた。 一方、タブレット端末を授業で活用する初年度となった。タブレット端末を 3～5 年生全員に配布し、授業で有効活用するため、教員の研修を積極的に実施し、学習の個別最適化をめざして、様々な取り組みを開始した。この結果、学校と家庭の両面において、タブレットを有効活用し、学習を進めることができるようになってきた。さらに感染症拡大により、やむを得ず学級・学年を閉鎖した場合でも、タブレットを使ったオンライン授業や課題学習をすることにより、児童の学習を保障することも可能となった。 [課題] コロナ禍が落ち着き始めたとはいえ、感染症には十分留意しながら、安全安心な学校運営を目指すことが大切である。このような環境において、夏合宿をはじめとする本校の行事の内容を再検討し、大切な教育的価値を維持しつつも、新しい時代に合わせた内容の見直しが必要になってきている。 また、タブレット導入 2 年目にあたり、令和 5 年度は、さらに有効活用できるよう、教員の資質向上を図るとともに、ICT 学習の環境整備をより一層進めていかなければならないと考える。

2. 自己評価

評価は4段階【A：十分である（よくできた）、B：ほぼ十分である（できた）、C：あまり十分でない（あまりできなかった）、D：改善を要する（できなかった）】

評価項目	具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価 結果	評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
1. 建学の理念に基づく学校教育目標の共有化	① 建学の精神に基づく学校教育目標を教員組織内で共通理解し、前年度の反省を踏まえた新たな到達目標を確実に共有するとともに、実行するための校務分掌を構築する。 (校務分掌表、各部、委員会報告書類をもとに、教職員に周知する。)	A	① 建学の精神に基づく学校教育目標を教員組織内でしっかり共通理解するための会議を実施。到達目標を確実に共有する機能的な校務分掌を構築し、運用した。	① 建学の精神に基づく学校教育目標を教員組織内で共通理解し、前年度の反省を踏まえた新たな到達目標を確実に共有するとともに、実行するための校務分掌を構築する。
	② 教育目標実現のために、教員組織で検討・研修を重ね、育友会総会及び保護者会で説明の機会を設けるとともに、学校だより、学級通信、校長室だより等を通じて具体的な取組みを伝える。 (全学年保護者会資料、学校だより、校長室だより、学級通信に記載し、教職員、保護者に周知する。)	A	② 教育目標実現のために、教員組織で検討・研修を重ねた。保護者には学校だより、学級通信、校長室だより等を通じて具体的な取組みを伝えた。	② 教育目標実現のために、教員組織で検討・研修を重ね、育友会総会及び保護者会で説明の機会を設けるとともに、学校だより、学級通信、校長室だより等を通じて具体的な取組みを伝える。
2. ICT教育を推進し、教育の個別最適化をめざす	① タブレット端末導入2年目にあたり、デジタル教材、オンライン教材の有効活用に向け、各教科において研究と研修を図る。(授業研究部計画に基づき、デジタル教材の研究・研修)	A	① タブレット端末導入2年目にあたり、情報教育推進委員会が中心になり、デジタル教材、オンライン教材の研究と研修を実施した。学年ごと、教科ごとに、実績報告会を実施、情報を共有した。	① タブレット端末導入3年目にあたり、デジタル教材、オンライン教材の有効活用に向け、各教科において現状分析と研修を図る。
	② 各教科における、タブレット端末活用実績に基づき、有効活用を積極的に推進し、効果を検証する。(情報教育部報告により教職員で活用法を共有する。)	A	② 情報教育推進委員会が中心になり、タブレット端末活用法研究を推進した。学年ごとの目標に沿って、有効活用を進め、効果を検証した。	② 各教科における、タブレット端末活用実績に基づき、有効活用を積極的に推進し、効果を検証する。
	③ 各学年での学力定着を強化し、児童の学力向上を図る。タブレット導入にあたり、ICTを有効活用した学習の個別最適化を目指す。(タブレットを活用した個別最適化学習の実施、検証する。)	A	③ 児童のさらなる学力向上を図るため、ロイロノートを本格導入し、学年ごとにタブレットを有効活用した学習の個別最適化を行った。	③ 各学年での学力定着を強化し、児童の学力向上を図る。児童所有のタブレットをはじめ、ICTを有効活用した学習の個別最適化を目指す。
	④ 本校独自の情報科カリキュラムにおけるプログラミング学習を効果的に実践し、プログラミング的思考の定着を図る。 また、各学年の系統的な指導を実践する。(プログラミング学習を系統的に実施。内容を検証する。)	A	④ 本校独自の情報科カリキュラムにおけるプログラミング学習を効果的に実践し、プログラミング的思考の定着を図った。	④ 本校独自の情報科カリキュラムにおけるプログラミング学習を効果的に実践し、プログラミング的思考の定着を図る。また、各学年の系統的な指導を実践する。
	⑤ 情報科による「プログラミング教育」に基づき、5・6年生全員にその発展教育として「出張ロボット体験授業」を実施する。 また、希望者によるロボット教室を年間計画のもと開講し、WRO(World Robot Olympiad)への出場を目標に、技術力の向上を図る。低学年はアフタースクールと連携し、希望者体験教室を開催する。(発展学習として「出張ロボット体験授業」を実施する。)	A	⑤ 昨年度まで実施できなかった5・6年生「出張ロボット体験教室」を実施した。 また、希望者によるロボット教室を年間計画のもと開講。奈良県大会で優勝し、WRO(World Robot Olympiad)全国大会に出場した。低学年はアフタースクールと連携し、希望者体験教室を開催した。	⑤ 情報科による「プログラミング教育」に基づき、5・6年生全員にその発展教育として前年度に引き続き「出張ロボット体験授業」を実施する。 また、希望者によるロボット教室を年間計画のもと開講し、WRO(World Robot Olympiad)への出場を目標に、技術力の向上を図る。低学年はアフタースクールと連携し、希望者体験教室を開催する。

評価項目	具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価 結果	評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
3. 国際理解教育の充実	① 4技能強化と授業との連携を意識した英語モジュール学習を計画的に実施する。また、学習内容の充実を図る。(英語科モジュール実施計画により、全担任で共有。月ごとに確認する。)	A	① 英語科主導による英語モジュール学習の計画を立案。学級毎に実施し、学習内容の充実を図った。	① 4技能強化と授業との連携を意識した英語モジュール学習を計画的に実施する。また、学習内容の充実を図る。
	② 本校の特徴である国内留学の内容充実を図る。学年を拡大し、6年生でも実施する。帝塚山大学との連携により、効果的でリスクの少ない行事の在り方を模索し、対外的に発信する。また、年間英語カリキュラムにおいて、より効果的に位置づける。発達段階に応じて会話力が向上するよう、4年間のプログラムを構成する。(国内留学の効果的な実施。実施後児童アンケートにより内容を検証。保護者に提示する。)	A	② 国内留学は、夏休み中の帝塚山大学東生駒キャンパスを借用し、日常を離れた広々とした会場にて、より効果的でリスクの少ない行事として実施した。今年度から6年生でも実施し、4年目の仕上げとして新たな系統的プログラムを構築した。英語圏での実際の生活を想定し、英語の学習だけでなく、英語をツールとした様々な活動や学習をカリキュラムとして実施した。	② 本校の特徴である国内留学について、4学年を系統的に捉え、内容の充実を図る。帝塚山大学との連携により、効果的でリスクの少ない行事の在り方を追及し、対外的に発信する。また、年間英語カリキュラムにおいて、より効果的に位置づける。発達段階に応じて会話力が向上するよう、4年間のプログラムをさらに強化する。
	③ 国際理解の礎となる日本文化への理解が深められるような授業や校外学習を実施し、外部に発信できる情報を身につける。(外部に発信できる情報として日本文化の体験学習を実施する。)	B	③ 外部に発信できる材料として、海外に日本文化や伝統文化、伝統工芸を発信する計画を策定した。海外との交流機会がなく、実現にはいたらなかったが、和太鼓の体験や大和文華館見学を通して、伝統文化に触れ、そのことを保護者に知らせた。	③ 国際理解の礎となる日本文化への理解が深められるような授業や校外学習を実施し、外部に発信できる情報を身につける。
4. 特別活動・体験教育の充実を図り、ESD教育の展開をめざす	①-1 「本物にふれる教育」を定着させるため、各教科における校外学習・現場実習を一層充実させる。また、その効用を広く保護者や外部に広報し、本校教育の特徴をはっきり印象付ける。(ホームページ、学校だよりに記載し、保護者に周知する。)	A	①-1 「本物にふれる教育」を目指し、体験学習や出張授業などを積極的に採り入れた。また、全学年で夏合宿を開催し、内容についても、この機会に検討した結果、特に3・4年生の内容を大きく改善した。4年生では、身近な大阪湾の水産業や海の自然に着目し、海を学ぶ内容にした。	①-1 「本物にふれる教育」を定着させるため、各教科における校外学習・現場実習を一層充実させる。また、その効用を広く保護者や外部に広報し、本校教育の特徴をはっきり印象付ける。
	①-2 外部講師出張授業を積極的に計画実施する。また、外部機関と連携し、環境教育を一層推進することにより、ESD教育の展開を目指す。(全学年での外部講師授業を年間最低1回実施。)	A	①-2 外部講師出張授業を積極的に計画実施し、コロナ禍前の水準に戻した。また、奈良市や外部機関と連携し、環境教育を一層推進することにより、ESD教育を展開した。	①-2 外部講師出張授業を積極的に計画実施する。また、外部機関と連携し、環境教育を一層推進することにより、ESD教育の展開を目指す。
	② 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、教科・学年の枠を超えたカリキュラムマネジメントを行い、外部講師出張授業を積極的に計画実施する。また、卒業生や保護者によるキャリア教育を推進する。(卒業生や保護者によるキャリア教育を実施。)	A	② 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、外部講師出張授業を積極的に実施した。出張授業内容に応じて、カリキュラムを学年間で調整した。また、卒業生によるキャリア教育を実施した。	② 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、教科・学年の枠を超えたカリキュラムマネジメントを行い、外部講師出張授業を積極的に計画実施する。また、卒業生や保護者によるキャリア教育を推進する。
5. 「帝塚山で学び、育つ」ことを意識した学園各中学校園の連携強化・内部進学への推進	① 帝塚山大学教育学部との連携を深め、授業研究、情報交換を充実させる。教育サポーターを充実させる。また、現代生活学部食物栄養学科との連携により、食育、健康教育を推進するほか、その他の学部、学科との教育連携を広げる。(帝塚山大学教育学部学生のエデュケーターを定期的に実施、充実を図る。)	A	① 帝塚山大学教育学部との相互の連携を深めた。特に、学生の現場経験を進めるために、教育サポーターを積極的に募集。定期的な参加により、指導の充実を図ることができた。また、現代生活学部食物栄養学科との連携により、食育、健康教育を推進した。	① 帝塚山大学との連携を深める。教育学部とは、情報交換を積極的に行い、授業研究及び教育サポーターを充実させる。現代生活学部食物栄養学科とは、食育、健康教育を推進する。また、全学教育開発センターの協力を受け、教育サポーター活動をより充実させるほか、心理学部からも学生を受入れ、より連携を深める。

評価項目	具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価 結果	評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
5. 「帝塚山で学び、育つ」ことを意識した学園各中学校園の連携強化・内部進学率の推進	② 帝塚山中学校・高等学校との生徒児童間及び教員間での教育連携の推進を図る。 また、内部進学推薦制度を有効に活用するために、制度の再検討を進め、内部中学出願率、進学率の向上を目指す。教科指導面における小学校と中学校間の情報交換を推進し、効果的な小中連携を実現する。(教科間における小学校と帝塚山中学校間の情報交換を推進する。)	B	② 帝塚山中学校・高等学校との生徒児童間の連携は十分できなかったが、教員間では、教育内容の情報交換などを行った。内部中学出願率、進学率は昨年並み。	② 帝塚山中学校・高等学校との生徒児童間及び教員間での教育連携の推進を図る。また、内部進学推薦制度を有効に活用するために、制度の啓発を進め、内部中学出願率、進学率の向上を目指す。教科指導面における小学校と中学校間の情報交換を推進し、効果的な小中連携を実現する。
	③ 帝塚山幼稚園との算数、英語などの授業連携を推進するとともに、教員交流を積極的に行い、幼稚園小学校両校園の教育内容の相互理解を深める。 また、帝塚山幼稚園との園児児童間交流を積極的に進め、連携を図る。(帝塚山幼稚園と小学校それぞれの教育内容情報を共有し、相互理解を図る。)	A	③ 帝塚山幼稚園と算数、英語の教員交流を実施したほか、幼稚園小学校両校園の教育内容の相互理解について、管理職を中心に交流を深めた。また、帝塚山幼稚園との園児児童間交流を開催した。	③ 帝塚山幼稚園との算数、英語などの授業連携を推進するとともに、教員交流を積極的に行い、幼稚園小学校両校園の教育内容の相互理解を深める。また、帝塚山幼稚園との園児児童間交流を積極的に進め、連携を図る。
	④ 今後ますます少子化が進行する現状をふまえ、選ばれ続ける私学を目指し、学園としての内部進学率の在り方について共通認識を持つ。令和4年度の内部進学率を踏まえ、小学校から帝塚山中学校へ進学を希望する保護者の思いに応えることのできる進学制度について、中学校管理職と議論を重ね、現制度の有効運用を促進し、少子化に対応できる新制度の方向性と小学校の学習カリキュラムの整備及び基礎学力の向上を目指す。また、保護者の要望に応えるため、進路指導部を中心に、内部・外部両方向にむけた進路指導の実現を図り、児童それぞれの特性に応じた進学指導・助言を充実させる。(児童それぞれの特性に応じた進学指導・助言を充実。家庭との連携による内部進学率を向上させる。)	A	④ 小学校から帝塚山中学校への進学制度について、中学校管理職と議論を重ね、現制度の再確認を実施した。小学校の学習カリキュラムの整備を進め、基礎学力を向上させた。また、保護者の要望に応えるため、進路指導部を中心に、内部・外部両方向にむけた進路指導の実現を図り、児童それぞれの特性に応じた進学指導・助言を充実させた。	④ 総合学園としての内部進学率の在り方について共通認識を持つ。令和5年度の内部進学率を踏まえ、進学制度について、中学校管理職と議論を重ね、少子化に対応できる新制度の方向性と小学校の学習カリキュラムの整備及び基礎学力の向上を目指す。また、進路指導部を中心に、内部・外部両方向にむけた進路指導の実現を図り、児童それぞれの特性に応じた進学指導・助言を充実させる。
		B		
6. 人権教育・道徳教育を強化し人間性を築く	① 児童の人権意識を高めるには、教員組織の共通理解に基づく日々の生活指導が重要である。規範意識を推進し、多様性を認める人権の新しい価値観の育成に努める。(人権委員会主導による人権学習を学期に1回は実施。学習内容・目標を保護者に伝える。)	A	① 人権委員会の主導のもと、児童の人権意識を高めるために日々の生活指導を重視し、人権学習を学期に1回は実施した。また、道徳の学習内容の充実を図り、新しい価値観を育成した。	① 児童の人権意識を高めるには、教員組織の共通理解に基づく日々の生活指導が重要であるという認識のもと、規範意識を推進し、多様性を認める人権の新しい価値観の育成に努める。
	② 年間計画に従った道徳教育を実施すると共に、クラスの実情に応じた授業を構成し実践することにより、普遍的な人間性の育成を目指す。学習の成果を学年ごとに持ち寄り、学習内容についての検証を行う。(学期ごとの道徳教育目標を各学年で設定。系統的に検証する。)	A	② 年間計画に従った道徳教育目標を学期ごとに設定。クラスの実情に応じた授業を実践した。またその内容を集約し、全教員で共有するとともに、検証を行った。	② 年間計画に従った道徳教育を実施すると共に、クラスの実情に応じた授業を構成し実践することにより、普遍的な人間性の育成を目指す。学習の成果を学年ごとに持ち寄り、学習内容についての検証を行う。

評価項目	具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価 結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
7. 学校評価の実 質化	① 保護者アンケートの集計結果・内容について検討し、その分析結果を職員会議で共有する。改善点や今年度の課題を教職員で共通認識し、問題点の改善、解決を図る。(保護者アンケートの結果を分析し、課題を教員間で共通認識を図る。)	A	A	① 昨年度末に実施した保護者アンケートの集計結果・内容について検討。その分析結果を活用して、問題点を改善、解決した。	① 保護者アンケートの集計結果・内容について検討し、その分析結果を職員会議で共有する。改善点や今年度の課題を教職員で共通認識し、問題点の改善、解決を図る。
	② 学校関係者評価委員会の評価結果を教職員に周知徹底し、学校運営の改善を図る。(学校関係者評価を踏まえ、改善策を検討・実施。)	A		② 4月19日に学校関係者評価委員会を開催。その評価結果を踏まえ、学校運営を改善した。	② 学校関係者評価委員会の評価結果を教職員に周知徹底し、学校運営の改善を図る。
8. 教員評価の実 施推進	① 各教員が明らかにした年度重点目標を踏まえ、中間期面接、学年末面接を実施し、各自の目標達成状況及び進捗状況を確認する。(各自の重点目標達成状況及び進捗状況。)	A	A	① 各教員が掲げた今年度重点目標を集約し、中間面談、学年末面談を通じて各自の目標達成状況及び進捗状況を確認した。	① 各教員が掲げた年度重点目標を踏まえ、中間期面接、学年末面接を実施し、各自の目標達成状況及び進捗状況を確認する。
	② 教員自己評価の内容を教員組織内で共有し、全体の課題の認識を目指す。これにより、組織全体としての意識向上を図り、学校運営の改善を目指す。(教員各自が当事者意識を持ち、組織全体としての意識向上を図る。)	A		② 教員自己評価の内容を教員組織内で共有し、全体の課題を認識し、学校運営を改善した。	② 組織全体としての意識向上を図り、学校運営を改善するため、教員自己評価の内容を教員組織内で共有し、全体の課題の認識を目指す。
9. 募集活動・広報 活動の強化	① 総合学園のメリットを最大限に広報し、学園と連携して、入学募集定員の充足を図る。コロナ禍で得た広報活動経験を活かし、各家庭に正確で新しい情報を届けることができるように、オンライン等を活用し、効果的な広報活動を進める。(効果的な広報活動の実施。保護者の関心を集めるため、担当制度を定着。募集定員以上の入学者を確保。)	B	B	① 各家庭に正確で新しい情報を届けることができるように、ホームページを充実するなど、効果的な広報活動を進め、総合学園のメリットを最大限に広報したが、入学募集定員の充足には至らなかった。入学志願者は昨年実績より増えた。	① 総合学園のメリットを最大限に広報するため、プロジェクトチームを編成し、広報の強化及び入学募集定員の充足を図る。コロナ禍で得た広報活動経験を活かし、各家庭に正確で新しい情報を届けることができるように、SNS等を活用し、効果的な広報活動を進める。また、出願手続きのオンライン化を目的にWEB出願システムを導入する。
	② 幼児教室や外部幼稚園にて体験授業、説明会、教育講演会を積極的に開催し、教育方針・教育内容の理解を深めていただくよう、内容の充実を図る。(外部幼稚園・幼児教室での広報活動の機会を増加。新しい機会を開拓。)	A		② 幼児教室や外部幼稚園にて体験授業、説明会、教育講演会を積極的に開催。新しい対象園を開拓し、昨年度より回数・内容ともに向上した。	② 幼児教室や外部幼稚園にて体験授業、説明会、教育講演会をさらに積極的に開催し、教育方針・教育内容の理解を深めていただくよう、内容の充実を図る。
	③ 在校生保護者や卒業生に協力を仰ぎ、本校の教育を体験して感じた魅力を広く外部に発信し、「帝塚山教育」の理解をより深めていただく。(在校生保護者や卒業生からナマの声を集めて周知する。)	B		③ 卒業生保護者の会の活動が再開され、在校生保護者や卒業生を通じての本校の魅力の発信を行った。	③ 在校生保護者や卒業生に協力を仰ぎ、本校の教育を体験して感じた魅力を広く外部に発信し、「帝塚山教育」の理解をより深めていただく。
10. 学校リスクの 対策強化・保健衛 生管理の徹底	① 事件・事故の未然防止に向け、安全対策の徹底と個人情報、守秘義務の徹底を図る。また、保護者に対する情報セキュリティやマナーなどの啓発活動を充実させるとともに、いじめ防止対策アプリ「スタンドバイ」システムを活用し、問題点を教員組織で共通認識する。(防災訓練計画案、校長室だより、防災訓練マニュアル、ホームページ、学校だよりにより共有。)	A	A	① 事件・事故の未然防止に向け、安全対策の徹底と準備について、職員会議において周知徹底し、教職員の意識向上を図った。また、保護者に対する情報セキュリティやネットマナー等の啓発活動については、文書を通じて実施した。いじめ防止対策アプリ「スタンドバイ」システムを活用し、問題点を教員組織で共通認識した。	① 事件・事故の未然防止に向け、安全対策の徹底と個人情報、守秘義務の徹底を図る。また、保護者に対する情報セキュリティやマナーなどの啓発活動を充実させるとともに、いじめ防止対策アプリ「スタンドバイ」システムを活用し、問題点を教員組織で共通認識する。

評価項目	具体的目標・方策及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価 結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
10. 学校リスクの 対策強化・保健衛 生管理の徹底	② 児童の保健衛生管理を一層向上させるため、保健体育部を中心に安全・健康対策の徹底を図り、内容を検証する。また、感染症対策（新型コロナ、インフルエンザ等）に向けて効果的な予防策を推奨し、感染症の予防に努める。（月1回の防災訓練（地震・火災・Jアラート）を確実に実施。内容を検証し保護者にも伝える。）	A	A	② 月1回の防災訓練を実施した。また、児童の保健衛生管理を一層向上させるため、保健体育部が中心となり、安全・健康計画を立案。内容の徹底を図り、感染症対策（新型コロナ、インフルエンザ等）に向けて効果的な予防策を推奨し、感染症の予防に努めるとともに保健日より周知した。	② 児童の保健衛生管理を一層向上させるため、児童生活部を中心に安全・健康対策の徹底を図り、内容を検証する。また、感染症対策（新型コロナ、インフルエンザ等）に向けて効果的な予防策を推奨し、感染症の予防に努める。
11. 研究・研修の 推進	① 新しい授業作りを進めるために、私立小学校連合会の研修活動や他校との交流を積極的に進め、最新の情報収集や教員交流に努める。（毎学期に全校的な授業研究を実施。他校とも交流する。）	A	A	① 私立小学校連合会の研修活動がほぼ従来通り開催され、学校間交流が活性化してきた。この機会を活用し、研修活動や研究など、他私学との交流をさらに積極的に進めた。	① 新しい授業作りを進めるために、私立小学校連合会の研修活動や他校との交流を積極的に進め、最新の情報収集や教員交流に努める。
	② 本校独自の「おしらせ学習」を一層充実させ、「課題解決学習」、「ESD教育」について研究し、授業実践に反映する。（内容が充実したものとなった「おしらせ学習」を保護者に訴求し、評価、賛同を得る。）	A		② 「課題解決学習」、「ESD教育」について、研究・成果を校内に掲示するとともに、本校入学を希望する保護者層にも充実を図った本校独自の「おしらせ学習」を用いて、広く広報した。	② 本校独自の「おしらせ学習」を一層充実させ、「課題解決学習」、「ESD教育」について研究し、授業実践に反映する。
	③ 新しい時代の指導体制に向け、教科担任制の導入を確立し、効果的な教員配置を実施し、新しい学校運営組織を構築する。（高学年での新教科担任制を実施。内容を検証。）	A		③ 5・6年生において、教科担任制を完全導入した。また、その成果について検証し、今後の改善を図るため、課題を確認した。	③ 新しい時代の指導体制に向け、高学年における教科担任制を確立し、効果的な教員配置を実施し、新しい学校運営組織を構築する。
	④ 各学年での学力定着を強化し、児童の学力向上を図る。タブレット導入にあたり、ICTを有効活用した学習の個別最適化を目指す。（基礎学力定着の強化・充実を図る。）	A		④ 児童のさらなる学力向上をめざし、各学年での学力定着を図った。また、タブレットを活用し、個別学習ソフトウェアを有効活用した学習の個別最適化をめざした授業実践を研究している。	④ 各学年での学力定着を強化し、児童の学力向上を図る。タブレットをはじめ、ICTを有効活用した学習の個別最適化を目指す。
	⑤-1 授業力の一層の向上を図るため、帝塚山大学教育学部と連携し、研究公開授業を積極的に実施する。また教育インターン活動を推進する。（連携研究授業の実施・インターン活動の充実。）	A		⑤-1 帝塚山大学教育学部の授業見学やインターンシップ活動を通して、両校が連携を深めると共に、授業力のより一層の向上を図るため、校内公開授業を積極的に実施した。	⑤-1 授業力の一層の向上を図るため、帝塚山大学教育学部と連携し、研究公開授業を積極的に実施する。また教育インターンシップ活動を推進する。
11. 研究・研修の 推進	⑤-2 ICTを活用した授業実践について、教育内容・方法等に関する研修を実施する。また、その内容を検証し、問題点を修正する。（タブレットを活用した授業研究の実施及び学習ソフトウェアの充実を図る。）	A	A	⑤-2 ICTを活用した授業実践について、研究授業を実施した。活用法や教育内容について検証し、問題点を修正した。	⑤-2 ICTを活用した授業実践について、教育内容・方法等に関する研修を実施する。また、その内容を検証し、問題点を修正する。
12. 経営安定化策 の強化	① 費用対効果を十分に考慮した学校予算の精査などの節減対策をさらに推進する。（決算状況を教員間で共通理解）	A	A	① 費用対効果を十分に考慮した学校予算の精査などの節減対策をさらに推進した。	① 費用対効果を十分に考慮した学校予算の精査などの節減対策を推進する。また、学納金の改訂について、検討する。
	② 教員の健康管理の徹底。教員組織の安定を図る。（メンタルヘルスケアの実施。）	A		② 教員の心身の健康管理を啓発。相談しやすい雰囲気作りを進めると共に、教員組織を安定させた。	② 教員の健康管理を徹底し、教員組織の適正を図り、人件費の削減を進める。

3. 学校関係者評価

(学校関係者評価実施日：令和6年4月23日)

学校関係者評価委員会委員：帝塚山小学校育友会役員（会長・副会長）、帝塚山大学教育学部教授、
帝塚山幼稚園園長）

意 見	改 善 方 策
① 令和5年度に＜戻す＞というより、これまでのものを踏襲しつつ、新しいものも取り入れて新しいものを打ち立てようとしていた。学力は目に見える成長であり、その過程も一緒に楽しむことのできるのが学校行事である。ホンモノに触れ、体験授業や出張授業、合宿も内容を検討され、学校の行ってきた努力が見え、伝わってくる。その時その時の瞬間的なものではなく、そこへ向いていく達成感や（行事が）終わってからの様子にも、帝塚山らしさが見える。もりだくさんではあるが、それぞれができていたことが良かった。	① コロナ禍の中、本校教育の大きな柱でもある体験学習・宿泊行事が思うようにできない時期があった。この時期を「できなかった」と諦めるのではなく、今まで実施してきた内容を見直し、現状に沿った内容に改めるべきところは改め、新しい時代に向かう子どもたちにとって、よりよいものに改善していく「見直しの期間」であるとポジティブに捉え、時期や内容を見直し、調整してきた。その成果として、令和5年度、ようやく全ての見直しが完了し、新しい内容に改めることができた。今後は、さらに吟味を加え、状況にあった、よりよいものにしていく。
② デジタル機器の発達にあわせ、早く導入すれば、子どもたちも早く慣れていく。いじめ問題と同様で、避けて通れない。前向きに取り組む時代に子どもたちは生きている。触らないのは、ナンセンスだと思う。これまでのように、様々なことを先駆けとして取り組んできた帝塚山小学校として、進めていってほしい。	② タブレットを個別導入して2年が経過、発達段階に応じた各学年での活用方法が定着してきた。また教員側の活用に関する研修も充実してきたことで、授業での活用についても、さまざま実践することができるようになってきた。今後は活用方法について、さらに研修・経験を積み重ね、学習の個別最適化をより一層進めていく。一方で、このような機器に頼らない、小学生として本来大切な基礎の基礎である「読み・書き・計算」について、より一層の定着を図り、基礎学力の向上を目指していく。
③ 大学小学校連携に関して、学生にとって勉強する機会として、昨年度からお世話になっている。作品展出品の3年生作品は、18号館に飾ることで、子どもの力を目の当たりにすることができ、また、美術評価のあり方についても考えさせられた。また、コロナ前には、小学校で、公開授業の見学機会が学生にもあったと記憶している。今後は、絵本の読み聞かせをする等のチャンスをいただき、学生を指導していくための連携を強めたい。	③ 大学との連携により、小学校児童が生きた学習ができる機会が増え、大変ありがたいことであると感じている。一方で、このことは大学生にとっても、大変貴重な経験であることを改めて感じることもできた。年度末に小学校での学習サポーター（インターンシップ）を教育学部以外でも募集したところ、教員志願者をはじめ、多くの学生が希望を出してくれたことから、学生の意欲の高さが伺える。今後はこのような意欲に応えるためにも、大学小学校連携事業をさらに積極的に進めていく。
④ 幼稚園でもテーマとしてあげられていた、学園内連携は、大きなメリットがある。学園内のメリットを是非生かして欲しい。連携をとって、広報活動を行う中で、本校の目指す教育の観点を聞く機会を持ってもらった。そこで、改めて、「あ、繋がっているな。」と分かり、外部へ発信できると思った。	④ 大学だけでなく幼稚園との連携は、内部進学志願者をさらに安定確保するためにも、大変重要なポイントであると考えている。幼稚園との交流や連携を深めることにより、幼稚園保護者が内部小学校をより一層理解してくれるようになり、安心して内部進学できるようになってくるといえる。またこのことは、外部の入学志願者に向けても大きな安心材料になると考えられるので、幼小連携をさらに積極的に進め、その情報を外部に発信していく。
⑤ 情報を発信するには、＜読み手側＞の気持ちを汲むことも必要。第三者的意見に保護者の考えや卒業生の意見も取り入れるとよいと考える。良い内容の教育を行っているのも、もっと自慢をしてもよいのではないかと。例えば、高学年の入学式もそうである。9-③の評価を（9月中間期では）Cとされているが、期待しているので、評価をあげてもらいたい。	⑤ 情報の発信はどうしても、発信者主体になってしまいがちであるが、受け手（読み手）の立場に立った情報提供が大きな意味を持つことを改めて考えさせられた。今後は、現保護者や卒業生の声も頂戴しながら、受け手がより身近な情報と意識できるよう、より充実した内容の情報発信にしていく。